

「地の塩」プロジェクトを通して学んだこと

神学部教授 勝又 悦子

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。

また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

(マタイによる福音書 5章 13-16節)

今週は同志社スピリット・ウィークということで、同志社の精神と伝統に関係している取り組みである神学部の「地の塩」プロジェクトの取り組みから感じていることをお話したいと思います。

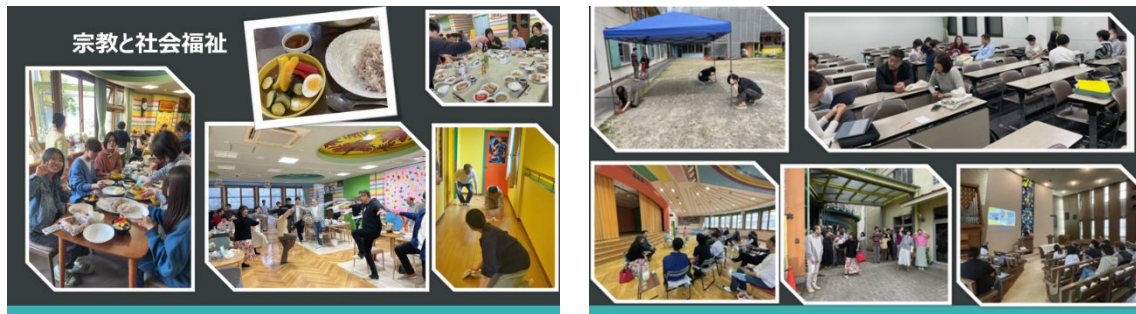
今、読んでいただいた聖書箇所に根差した「地の塩」プロジェクトは、2019年度から「All Doshisha 教育推進プログラム」のバックアップを受けて展開しています。IT技術を駆使して、基本的な知識や必要な情報は、学生の都合に合わせてオンデマンド動画授業でインプットすることで学生を教室から解放し、空いた時間で学生は社会の中で実践を行い、教室での対面授業では自身の体験を共有し、深め合います。様々な手法をブレンドした学び、ブレンディッドラーニングです。その目的は、社会にコミットする人間の育成であり、本学の建学の精神に関わるものです。

このプロジェクトの発端でもあるのが、滋賀県東近江市にある知的に障がいのある方たちが生活する^{しよほう}止揚学園です。神学部の基幹科目である「宗教と社会福祉」では、止揚学園でのフィールドワークを行います。

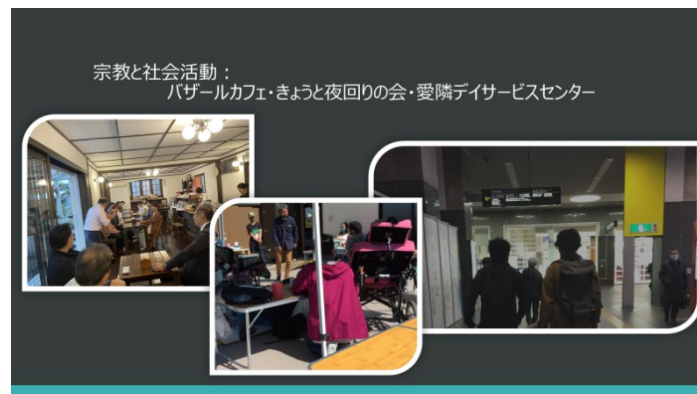
2019年に順調にスタートしましたが、翌2022年は、コロナ禍でフィールドワークも中止となり、授業も中止になりました。コロナの影響が続く中、模索を続けながら「宗教と社会活動」を開講し、バザールカフェ、きょうと夜回りの会、社会福祉法人イエス団 愛隣デイサービスセンターに活動の場を広げ、京都市多文化交流ネットワークサロンを拠点に、京都の中でも、戦前戦後を通じて、多くの在日韓国人・朝鮮人の方々が暮らしてきた東九条について学ぶことも始めました。そして、2023年度には、「宗教と国際社会」として、バングラデシュの児童養護施設で活動を進めるバングラデシュ政府認定のNGO組織「Delight Foundation」のお支えを頂き、海外でのフィールドワークもすることができました。

これら、どの施設も機関も、同志社に関わる先輩たちが築き上げた、まさに本学のスピリットと伝統にあり、ご支援を感謝する次第です。他学部からの履修も増えており、今後、さらに、全同志社の取り組みとして大きくしていきたい所存ですので、ここにいらっしゃる神学部以外の方も、是非、履修してください。

画像を紹介したいと思います。



この画像は、春学期の止揚学園での合同フィールドワークの様子です。あたたかな食卓を囲み、教員も一緒になって楽しんでいます。障がいのある仲間のみなさんと一緒にお仕事をしたあとは、分かち合い、その後、学生は、個別にフィールドワークに行かせていただきます。そして、教室では少人数のグループでみっちり議論し、全体報告会でまとめます。またこちらは、秋学期に進めている「宗教と社会活動」の様子です。バザールカフェでお話を伺い、こちらは2021年の画像ですが、社会福祉法人イエス団 愛隣デイサービスセンター



でのお花見の様子です。

そして、昨年度に開講した「宗教と国際社会」は、本年度、フィールドワーク出発寸前で、バングラデシュでの動乱のため取消になってしまいましたが、他方で、この授業においては、ぎりぎりの状況に対峙している子どもたちの社会と関わるのだということを実感し襟をただす思いです。

このような体験の中で、学生自身はどのように感じているでしょうか。ここで、学生の感想

を紹介します。止揚学園でのフィールドワークからの感想です。

「私は元々不器用で作業が滞ってしまったときに、仲間の方が、声に出してではなく、体を使って応援してくださった。学園の方の中、とりわけ言葉を話すことが難しい方は、それぞれの方法で動きや表情で伝えてくれる。そして、その思いはしっかりと伝わってきた。言葉はとても便利なものだ。思っていなくても言うことができる。しかし、行動で伝えてくれたことは気持ちのない言葉よりも温かい。だからこそ、初めて行った時から止揚学園はとても暖かいなと感じた気がする。私は言葉で伝えることができる。しかし、思いがどれだけ大切なのかを今学期の実習を通して身を持って学んだ。」

また、バングラデシュでの養護施設の子どもたちとの体験のあとで次のような感想を寄せた学生もいます。

「隣人を自分自身のように愛しなさい」との教えを子どもたちが実践している場面をプログラムの中で何度も見ました。子どもたちは、常に自分よりも他者に心を向け、私たちの必要なことに気を配り、助けてくれました。雨や日差しから私たちを守るために傘をさし、手がふさがっていたら荷物を持とうとしてくれ、暑さによって弱っている時は団扇等で仰いでくれ、子どもたちは同じ大変な状況にあっても常に私たちを最優先に考えて行動してくれました。決して、子どもたちはキリスト教信仰とその実践を強制されている訳ではなく、子どもたちが信仰（宗教）の重要性を知っていることに、私はとても感心しました。」

すでに、これらの感想からも多くのことを感じます。そもそも、果たして「学ぶ」という意識が適切なのかという疑問も本年度の春学期のメンバーから出されています。

教員の体験は、実際に実践へ赴く学生には足元にも及ばないのですが、ここ5年継続して関わっている者として一つ感じるのは、同じ時間を共有すること、一緒にいることに意味があるのではないかとことです。私たちは福祉の専門家でもなく、何もできないし、むしろ、学生の感想にあるように、私たちが受け入れられていると感じるのですが、その中で、人々は、社会は、すべてものは、つながっているということをますます感じています。止揚学園では、仲間の方のお父様のお別れの式に私たちも参列させていただきました。その和やかな雰囲気の中で、生と死もつながっているのだということを感じました。そのようなつながりの中で、仲間のみなさんや、バングラデシュの子どもたちの手のあたたかさというものを感じてきました。

それは、また、ヘブライ語聖書の中の神が、「私たちと一緒にいる神である」—ヘブライ語では「イマヌエル」という表現になるのですが—ということを想起させます。何かをしてくれるわけではないし、姿が見えるわけではないが、「一緒にいる」という意識が力になる、そのような神観が思い起こされます。

「イマヌエル」、私たちと一緒にいる神・・・という表現は、クリスマスに特にピックアップされる表現ですが、「～と一緒にいる」という表現は、現代ヘブライ語でも、日常的に使われる表現です。「一緒にいる」「同じ時間と空間を共有する」ということに、そもそも意味があるのだ

食べものに味を付けることができる、そして命ある万物が必要不可欠とする塩が析出するのです。

実は、本日紹介したフィールドワークの受け入れ先の画像には、すべてに、食に関わるシーンが含まれていること、お気づきでしょうか。一緒にいるということ、それは、また食をともにすることでもあります。私たちは一緒にいることしかできないかもしれない。しかし、いつの日か、一緒に囲む食卓で味をつけるために必要な地の塩となるために、そして、万物が必要とする塩のような存在になるために、厳しさの中で自分を鍛えていくことが求められているのではないかと感じます。

お祈りさせていただきます。

天のお父様

聖書から名前をいただく「地の塩」プロジェクトにおいて、本学のスピリットの生きる施設や環境の中で、様々な人々と一緒にいること、人としての根幹に関わる学びをさせて頂けることに感謝します。同志社のスピリットに根差す「地の塩」として社会とともにあり、そして、中東の最も厳しい気候の中で、地の一番低いところでこそ析出される「地の塩」としての、時に厳しいであろう役割を果たせるように、これからも、私たちを見守ってください。そして、多くの争いと哀しみが地の塩の地で広げられています。その悲しみが癒され、平和の中で、「地の塩」が生み出されることを願います。この祈りを主イエスの御名によって御前におさげいたします。

アーメン